【論文】

宮沢賢治文学における地学的想像力（八）

応用編：「岩頸」意識について ―〈現実〉と〈心象〉―

鈴木健司

本稿は「宮沢賢治文学における地学的想像力」というテーマの下に企図された、連作論文の一つである。これまで、（一）「基礎編・珪化木（Ⅰ）及び瑪瑙」（「文学部紀要」文教大学文学部第21-2号）、（二）「基礎編・珪化木（Ⅱ）」（「言語文化」第20号、文教大学言語文化研究所）、（三）「基礎編・〈まごい淵〉と〈豊沢川の石〉」（「注文の多い土佐料理店」第12号、高知大学宮沢賢治研究会）、（四）「応用編・楢ノ木大学士と蛋白石、発展編・ジャータカと地学」（「文学部紀要」文教大学文学部第22-1号）、（五）「応用編・修羅意識と中生代白亜紀」（「文学部紀要」文教大学文学部第22-2号）、（六）「応用編・第三紀泥岩と影―朔太郎的不安との類似性―」（「文教大学国文」第38号）、（七）基礎編：「〔地質調査ルートマップ〕」の検証（その1）―「五間ヶ森」とその周辺―」（「文学部紀要」文教大学文学部第23-1号）を発表している。

本稿では、賢治テキストにしばしば見出される「岩頸」の語に着目し、「岩頸」という地学用語を、賢治の〈心象〉世界の特異性を示すマーカーとして捉え直すことができるのではないかという仮説をたて、その立証を試みる。

キーワード：岩頸、心象、地学、沼森、南昌山

一　〈伸びるもの〉としての「岩頸」

「歌稿B、№240」（大正四年四月）に次の短歌がある。

毒ヶ森
南昌山の一つらは
　ふとおどりたちてわがぬかに来る。

大正四年四月は、賢治が盛岡高等農林に入学した時期である。賢治の立ち位置が不明なためか、解釈の難しい作品となっている。「一つら」という表記も曖昧である。その上で私は、毒ヶ森、南昌山のうちの一つが突然踊り立ち、伸びるようにして、遠く離れた自分の額に向かってくる、という内容の短歌と読みとっているが、そうした内容であるとするなら、この短歌を一般尋常な短歌として扱うことはできない。

「大正三年四月」に見出される、病的と判断できる短歌群（具体例は拙論（六）「応用編・第三紀泥岩と影―朔太郎的不安との類似性―」「文教大学国文」第38号を参照願いたい）を前提とするならば、この短歌に関しても、実際に賢治の目にはそのように見えたのだと判断することが、もっとも自然であろう。

次に引用するのはルイス・キャロル著『不思議の国のアリス』（田中俊夫訳、岩波少年文庫より）の「涙の池」の章である。

「まあ、へんてこれんな！」とアリスはさけびました。（あんまりおどろいたので、とっさのまに正しいことばづかいを忘れてしまったのです。）「あたし、こんどは世界一大きい望遠鏡みたいにぐんぐんのびてゆくわ！　足さん、さようなら！」（なぜって、アリスが足のほうを見おろすと、足ははるかかなたに遠ざかってゆき、もうほとんど見えないくらいでした。）

これを視覚異常と捉え、「不思議の国のアリス症候群（Alice in Wonderland syndrome, AIWS）と呼ぶことがある。一九五五年に精神科医トッド（John Todd）により名付けられたもので、知覚された外界のものの

大きさや自分の体の大きさが通常とは異なって感じられる状態をいう。足が遠く伸びていったアリスの場合は〈小視〉の状態で（図１）、山が額に伸びてくると感じた賢治の場合は〈大視〉の状態といえるだろう。その原因を問うことは本稿の狙いではないので、ここでは精神科医・福島章の著『不思議の国の宮沢賢治―天才の見た世界―』（日本教文社、平８・８）を紹介するにとどめる。

図１　アリス（挿絵 ジョン・テニエル）

〈少視〉にしろ〈大視〉にしろ、視覚の変容であり、今回の例は両例とも〈伸びる〉ということで共通する。アリスは足が小さく見えることにより自分の身体が伸びたと認識したと考えられ、賢治の場合山が大きく見えることにより、山が伸びたと認識したと考えられるのである。

賢治作品で、木が踊りだしたりすることは童話「かしはばやしの夜」を挙げるまでもなく、決して珍しいことではない。電信柱ですら歩きだす（童話「月夜のでんしんばしら」）。それにしても、なぜ「毒ヶ森」や「南昌山」といった山が踊り立ったのか。それを、賢治のアニミズム的傾向として分析することや、「不思議の国のアリス症候群」として説明することも有効な方法ではあるだろうが、賢治文学全体を視野に入れたとき、さらに多面的に考察しなければならない複雑さが賢治のテキストには存するといわざるを得ないはずだ。

私は、有効と思われる分析の一つに、賢治の「地学的想像力」というものを想定しているが、本稿では特に「岩頸」という賢治の地学的な知見を視点に、考察

を進めていきたい。

「毒ヶ森／南昌山の一つらは／ふとおどりたちてわがぬかに来る」という短歌において、毒ヶ森、南昌山という実在の山名が使用されたことの背景には、おそらく地学的意味がある。毒ヶ森も南昌山も賢治が「岩頸」と捉えていた山だということだ。そして、「岩頸」に関わって、特に重要なことは、賢治テキストにおいて「岩頸」は〈伸びる〉ものとして扱われている点である。

童話「楢ノ木大学士の野宿」に次のような箇所がある。

「ははあ、あいつらは岩頸だな。岩頸だ、岩頸だ。相違ない。」

そこで大学士はいゝ気になって、

仰向けのまゝ手を振って、

岩頸の講義をはじめ出した。

「諸君、手っ取り早く云ふならば、岩頸といふのは、地殻から一寸頸を出した太い岩石の棒である。その頸がすなはち一つの山である。えゝ。一つの山である。ふん。どうしてそんな変なものができたといふなら、そいつは蓋し簡単だ。えゝ、こゝに一つの火山がある。熔岩を流す。その熔岩は地殻の深いところから太い棒になってのぼって来る。火山がだんだん衰へて、その腹の中まで冷えてしまふ。熔岩の棒もかたまってしまふ。それから火山は永い間に空気や水のために、だんだん崩れる。たうとう削られてへらされて、しまひには上の方がすっかり無くなって、前のかたまった熔岩の棒だけが、やっと残るといふあんばいだ。この棒は大抵頸だけを出して、一つの山になってゐる。それが岩頸だ。ははあ、面白いぞ、つまりそのこれは夢の中のもやだ、もや、もや、もや、もや。そこでそのつまり、鼠いろの岩頸だがな、その鼠いろの岩頸が、きちんと並んで、お互に顔を見合せたり、ひとりで空うそぶいたりしてゐるのは、大変おもしろい。ふふん。」

それは実際その通り、

向ふの黒い四つの峯は、

四人兄弟の岩頸で、

だんだん地面からせり上って来た。
　　楢ノ木大学士の喜びやうはひどいもんだ。
「ははあ、こいつらはラクシャンの四人兄弟だな。よくわかった。ラクシャンの四人兄弟だ。よしよし。」
　　注文通り岩頸は
　　丁度胸までせり出して
　　ならんで空に高くそびえた。

「岩頸」に関し、賢治は楢ノ木大学士の口を借り、かなり正確な解説を書き込んでいる。「えゝ、こゝに一つの火山がある」から「それが岩頸だ」までが「岩頸」の地学的解説に当たる。「手っ取り早く云ふならば、岩頸といふのは、地殻から一寸頸を出した太い岩石の棒である」という表現もある。

さらに見落としてならないことは、この「岩頸」たちは〈伸びている〉ということである。「それは実際その通り、／向ふの黒い四つの峯は、／四人兄弟の岩頸で、／だんだん地面からせり上って来た」。「注文通り岩頸は／丁度胸までせり出して／ならんで空に高くそびえた」。

このテキストにおいて、「岩頸」が〈伸びる〉のは、夢の中での出来事ということになっている。楢ノ木大学士がテキスト上で見ている〈現実〉は通常の「岩頸」（「四つの峯」）であるのに対し、夢の中の「岩頸」は、〈伸びた〉「四つの峯」である。

次の引用は「第一夜」の末尾である。ここでは作品の視点が「岩頸」側にあり、いわば〈実在する夢の世界〉を感じさせる仕組みになっている。

「そんなら結構だ、さあもう兄さんたちはよくおやすみだ。楢ノ木大学士と云ふやつもよく睡ってゐる。さっきから僕等の夢を見てゐるんだぜ。」
　　するとラクシャン第四子が
　　ずるさうに一寸笑ってかう云った。
「そんなら僕一つおどかしてやらう。」
　　兄のラクシャン第三子が
「よせよせいたづらするなよ」
　　と止めたが
　　いたづらの弟はそれを聞かずに

光る大きな長い舌を出して
大学士の額をべろりと嘗めた。
大学士はひどくびっくりして
それでも笑ひながら眼をさまし
寒さにがたっと顛へたのだ。
いつか空がすっかり晴れて
まるで一面星が瞬き
まっ黒な四つの岩頸が
たゞしくもとの形になり
じっとならんで立ってゐた。

ここの引用では、特に「光る大きな長い舌を出して／大学士の額をべろりと嘗めた」の表現に注目したい。楢ノ木大学士の視点で構図を分析した場合、大学士は自分の方に伸びてきた岩頸によって額をべろりと嘗められた、ということになるはずだ。この構図は、冒頭引用した短歌「毒ヶ森／南昌山の一つらは／ふとおどりたちてわがぬかに来る」と同じである。ということは、楢ノ木大学士の夢の中での体験は、〈伸びる〉「岩頸」として、賢治自身の体験が作中に取り入れられた結果ということになる。

二　〈心象〉としての「岩頸」

〈心象〉の語は、〈心象スケッチ〉という語とともに、詩集『春と修羅』（大正13・4）や童話集『注文の多い料理店』（大13・12）段階からの使用であり、それ以前に作られた短歌作品に見出すことはできない。しかし、短歌中に指摘できる視覚異常体験（「不思議の国のアリス症候群」）を伴った短歌は、おそらく先駆的な〈心象〉の〈スケッチ〉と位置づけて差し支えないと私は考えている。青春時代（盛岡中学・盛岡高等農林）に書き留められた短歌の幾つもの素材が、後の詩や童話、さらに文語詩にまでジャンルを超え引き継がれたことの理由も、そこにあるといえると思う。童話「烏の北斗七星」、童話「ガドルフの百合」などが好例である。また、葛丸川の調査の際に作られたと推定される短歌（「歌稿A」№668、大正七年五月以降）「ほしぞらは静（シヅ）にめぐるをわがこゝろあやしきものに囲まれて立つ」は、童話「楢ノ木大学士の野宿」の

原点を示している。

特にここでは、短歌と文語詩をつなぐものとして、「岩頸列」（「文語詩一百篇」）に注目したい。変形の三連仕立てで、内容的には第一連は第三連に接続し、それを断ち切るように第二連が挿入されていると見ることができる。内容が奇妙で、解釈に戸惑う点も多くある。特に第二連の存在がこの文語詩の解釈を難解にしている。とはいえ、分かりにくいところに賢治文学の本質が垣間見えることも多々あるので、あえて、第二連を考察の対象としたい。

西は箱ヶと毒ヶ森、　　椀コ、南昌、東根の、
古き岩頸の一列に、　　氷霧あえかのまひるかな。

からくみやこにたどりける、　　芝雀は旅をものがたり、
「その小屋掛けのうしろには、　　寒げなる山によきによきと、
立ちし」とばかり口つぐみ、　　とみにわらひにまぎらして、
渋茶をしげにのみしてふ、　　そのことまことうべなれや。

山よほのぼのひらめきて、　　わびしき雲をふりはらへ、
その雪尾根をかゞやかし、　　野面のうれひを燃し了せ。

「毒ヶ森／南昌山の一つらは／ふとおどりたちてわがぬかに来る」と比較した場合、まず見て取れるのは、毒ヶ森、南昌山という山の名が共通している点である。文語詩「岩頸列」の場合、毒ヶ森、南昌山は岩頸列の一つとして、箱ヶ（森）、毒ヶ森、椀コ、南昌（山）、東根（山）の中に付置されている。

地学的に見た場合これらの岩頸列が本当にすべて「岩頸」なのか、地質図で判断する限りでは「岩頸」とはいえない山も含まれていると思われる。そこで本稿では、とりあえず、代表的な「岩頸」と見られる南昌山に的をしぼり考察することにする。

南昌山は江戸時代に「日本名山図会」の一つとして描かれ（図2）、かつ近年登山コースが整備され、比較的容易に頂上に立つことができる山である。

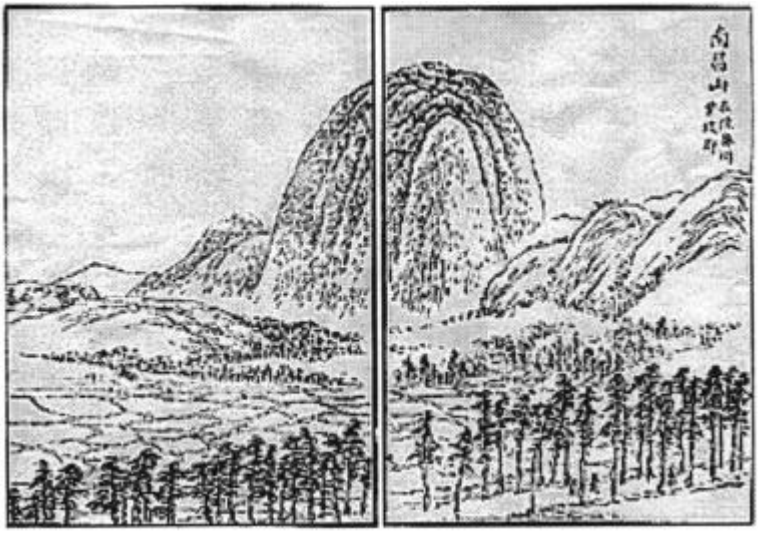


図２　南昌山の絵図（日本名山図会）

実地調査の結果確認できたことは、南昌山（写真１）は基本的には石英安山岩（デイサイト）（写真２・顕微鏡写真１）から成る山だということである。ただ、裾野付近は流紋岩質凝灰岩(写真３)に覆われており、はっきりとした石英安山岩（デイサイト）の露頭を確認するためには五合目以上に登らなければならないだろう。

石英安山岩（デイサイト）は二酸化ケイ素を63～70パーセント程度含む岩石で、流紋岩に次いで粘性のあるマグマが固まったものである。また、周囲の流紋岩質凝灰岩は男助層と呼ばれる凝灰岩層である。

南昌山の形成過程であるが、凝灰岩層を突き破って南昌山のマグマが上がってきたのか、南昌山の形成後凝灰岩層に覆われたのか、現時点では明確でない。ただ、凝灰岩層の風化は石英安山岩（デイサイト）に比べかなり早く進むため、南昌山が「岩頸」らしく見えることになる。実際、南昌山を「岩頸」と呼ぶことに問題はないようである。

なお、加藤貞一は『宮沢賢治の地的世界』（愛智出版、平18・11）で、南昌山に関し地学的な説明を施し

ているが、間違いが多いのでここに指摘しておく。加藤は南昌山の中腹から採取したという流紋岩質凝灰角礫岩の写真を提示しつつ、一方で、「南昌山の大部分は流紋岩です」と述べ、さらには、「南昌山山頂部はデイサイト質といわれるので、『これはこれ安山岩の岩頸にして』というのもあながち間違いではありません」と、説明にまったく一貫性がない。

問題点だが、まず、加藤の引用する「これはこれ安山岩の岩頸にして」の元となる短歌「いまははやたれか惑はんこれはこれ安山岩の岩頸にして」（「歌稿A、№336」、大正五年七月）は、「石ヶ森」を歌ったもので、南昌山のことではない。また、「南昌山の大部分は流紋岩です」という説明も間違いで、南昌山自体は変質デイサイト（石英安山岩）を主体とした山で、流紋岩は調査した範囲ではどこにも存在していない。

確認できるのは、山の中腹より下で、デイサイトを覆うように存在する流紋岩質の凝灰岩である。地学の専門家である加藤が、火山岩である流紋岩と堆積岩である凝灰岩を取り違えるはずはなく、疑問は増すばかりだが、加藤が採取したものは決して南昌山それ自体からのものではない。おそらく、加藤は南昌山の麓（南昌神社付近・男助層）を観察しただけと思われる。もし加藤が中腹から採取した流紋岩質凝灰角礫岩を、南昌山を成す主たる岩石だとするなら、マグマの塊であるはずの「岩頸」の定義から南昌山は大きく外れることになる。

南昌山はデイサイト(石英安山岩)の山だからこそ、賢治は〈岩頸〉と呼んだのである。むろん、流紋岩でも〈岩頸〉を形成するが、南昌山の場合には当てはまらない。

さて、〈岩頸列〉の一つ南昌山が「岩頸」であり、また、他の山々も賢治が記すように「岩頸」であったとして、そのことが文語詩「岩頸列」の成立、解釈にどのような意味をもつのか。

私の問題意識からいえば、「山によきによきと、立ちし」をどのように解釈するかが重要となる。一般的には、村上英一が『宮沢賢治　文語詩の森』（柏書房、平9・6）で記したように、〈客の不入り〉に関わるうらぶれた感じを表現したものと捉えるのが妥当といえるだろう。

ただ、第二連は、第一連、第三連と異なり、〈現実〉の〈岩頸列〉を描写したものではなく、伝聞の形式をとっている。つまりあえて伝聞の形式をとった意図というものがあったはずで、私はそれを、「芝雀」が体験した〈禍々しき事〉と解釈できるのではないかと考えている。

つまり、真の理由は、「小屋掛け」のうしろの〈岩頸列〉が、「によきによきと、立ちし」ことにあったのである。山が「立ちし」とは、〈伸びた〉ことであり、前章で確認した童話「楢ノ木大学士の野宿」での、「だんだん地面からせり上って来た」や「丁度胸までせり出して」に相当する表現と判断したい。

同作品には、「楢ノ木大学士の喜びやうはひどいもんだ」といった楽しげな表現も見出され、一見、文語詩「岩頸列」第二連を〈禍々しき事〉と読むことの傍証とするにふさわしくないと思われるかもしれない。しかし、岡村民夫が『イーハトーブ温泉学』（みすず書房、平20・7）で、「楢ノ木大学士の野宿」第三夜の恐竜の長い頸と第一夜の「岩頸」とのイメージの関連性を指摘しており、私の解釈の可能性を後押ししているように思う。自分の額の前に迫りくる恐竜の長い頸が大学士にとって〈禍々しき事〉に他ならないとすれば、「岩頸」が〈伸びる〉ことも〈禍々しき事〉の範疇だろう。童話「楢ノ木大学士の野宿」は、本来〈禍々しき事〉をユーモアに包んで物語化した作品と考えられる。

「芝雀」は、おそらく、「小屋掛け」のうしろの〈岩頸列〉が「によきによきと、立ちし」ことに驚き、みやこに逃げ帰ったのである。そのような解釈に立ったとき、はじめて、「みやこ」に帰った「芝雀」の、「口つぐみ」「とみにわらひにまぎらして」といった負の反応に対し、書き手が「そのことまことうべなれや」と追認することの整合性も見えてくるのである。

文語詩「岩頸列」の第一連・第三連は〈現実〉としての「岩頸」であり、第二連は〈心象〉としての「岩頸」といえるのでないだろうか。賢治の〈心象〉体験が「芝雀」を通じ再現されているとの判断である。

三　〈いかり〉と「岩頸」

「初期短編綴等」として纏められた小品群の一つに「沼森」という作品がある。「沼森」は盛岡市の北東部岩手郡滝沢村に位置する582メートルの山で、晴れていれば岩手山が間近に見える場所にある（写真４）。本文に登場する「大森」「石ヶ森」も実在の山で、ほぼ同じ区域に存在している。

「沼森」という作品も実に不思議な内容を有している。しかし、これまで、ほとんど研究の対象とされることはなかった。本稿では「岩頸」に関わる重要な作品と位置づけており、ごく短い作品でもあるので、全文を引用する。

石ヶ森の方は硬くて瘠せて灰色の骨を露はし大森は黒く松をこめぜいたくさうに肥ってゐるが実はどっちも石英安山岩（デサイト）だ。

丘はうしろであつまって一つの平らをこしらへる。

もう暮れ近く草がそよぎ防火線もさびしいのだ。地図をたよりもさびしいことだ。

沼森平といふものもなかなか広い草っ原だ。何でも早くまはって行って沼森のやつの脚にかゝりそれからぐるっと防火線沿ひ、帰って行って麓の引湯にぐったり今夜は寝てやるぞ。

何といふこれはしづかなことだらう。

落葉松（ラリックス）など植えたもんだ。まるでどこかの庭まへだ。何といふ立派な山の平だらう。草は柔らか向ふの小松はまばらです、そらはひろびろ天も近く落葉松（ラリックス）など植えたもんだ。

はてな、あいつが沼森か、沼森だ。坊主頭め、山山は集ひて青き原をなすさてその上の丘のさびしさ。ふん。沼森め。

これはいかんぞ。沼炭だぞ、泥炭があるぞ、さてこそこの平はもと沼だったな、道理でむやみに陰気なやうだ。洪積ごろの沼の底だ。泥炭層を水がちょろちょろ潜ってゐる。全体あんまり静かすぎる、おまけに無暗に空が暗くなって来た。もう夕暮も間近いぞ。柏の踊りも今時だめだ、まばらの小松も緑青を噴く。

沼森がすぐ前に立ってゐる。やっぱりこれも岩頸だ。どうせ石英安山岩、いやに響くなこいつめは。いやにカンカン云ひやがる。とにかくこれは石ヶ森とは血統が非常に近いものなのだ。

それはいゝがさ沼森めなぜ一体坊主なんぞになったのだ。えいぞっとする　気味の悪いやつだ。この草はな、この草はな、こぬかぐさ。風に吹かれて穂を出して烟って実に憐れに見えるぢゃないか。

なぜさうこっちをにらむのだ、うしろから。

何も悪いことしないぢゃないか。まだにらむのか、勝手にしろ。

柏はざらざら雲の波、早くも黄びかりうすあかり、その丘のいかりはわれも知りたれどさあらぬさまに草むしり行く、もう夕方だ、はて、この沼はまさか地図にもある筈だ。もしなかったら大へんぞ。全く別の世界だぞ、

気を落ちつけて（黄のひかり）あるある、あるには有るがあの泥炭をつくったやつの甥か孫だぞ、黄のひかりうすあかり鳴れ鳴れかしは。

実はこの作品は注意深く読むと、世界構造が微妙だが二重になっていることが分かる。二つの世界の存在が前提となり、賢治と思しき人物と沼森との関係性とが成り立っているのである。すなわち〈現実〉世界と〈心象〉世界の存在である。ただ、書き手にとって〈現実〉世界は〈心象〉世界に包含されているような認識システムがとられている。したがって読者は、常に書き手の〈心象〉世界から〈現実〉世界を覗く仕組みになっている。

世界構造の二重性という点からいえば、この作品は、童話「インドラの網」のような〈異世界への紛れ込み〉を扱った作品の一つとして位置づけることができる。「はて、この沼はまさか地図にもある筈だ。もしなかったら大へんぞ。全く別の世界だぞ」と恐れる賢治らしき主人公は、地図に「沼」の記載されていることを確認し、自分のいる世界が〈現実〉世界であることにほっとするのである。

この作品のさらに興味深いところは、沼森が〈いかり〉の感情を持っているということである。「沼森」に関しては「歌稿A、№337」（大正五年七月）に、そ

の原形を見出すことができる。

この丘のいかりはわれも知りたれどさあらぬ
さまに草穂摘み行く

この短歌は、「丘のいかり」のモチーフが、作品「沼森」の成立に欠かすことのできない条件として当初より存在していたことを明らかにしている。それにしても、「丘のいかり」とは何か、今ここで答えを提示することはできないが、沼森が「岩頸」であることと、〈いかり〉をもった存在であることとが、繋がっているのではないか、という推定を提示しておく。

沼森がすぐ前に立ってゐる。やっぱりこれも岩頸だ。どうせ石英安山岩、いやに響くなこいつめは。いやにカンカン云ひやがる。とにかくこれは石ヶ森とは血統が非常に近いものなのだ。

賢治は沼森や石ヶ森（写真５）を、石英安山岩からなる「岩頸」と見ている。また、詩「小岩井農場」下書、第五綴の中で、「鞍掛山」にふれた詩句だが「あれはきっと／南昌山や沼森の系統だ／決して岩手火山に属しない。／事によったらやっぱり／石英安山岩かもしれない・・・」と記しており、やはり「沼森」と、新生代第四紀の噴出である岩手山との違いを強く意識していたことが確認される。おそらく、賢治は「岩頸」の形成を、新生代第三紀の火山活動に因るものと認識していたのである。

沼森が「岩頸」であるという賢治の〈現実〉世界での地学的知見は、「岩頸」が〈伸びる〉存在であると同時に〈いかり〉をもった存在であることをも、〈心象〉世界において可能にしているのではないだろうか。

四　〈テキストの揺れ〉と「岩頸」

次の二つの短歌を比べてみる。

石ヶ森「歌稿Ａ、№336」（大正五年七月）

いまははやたれか惑はんこれはこれ安山岩の岩

頸にして

石ヶ森「歌稿B、№336」（大正五年七月）

こゝに立ちて誰か惑わん
これはこれ岩頸なせる石英安山岩（デーサイト）なり

歌稿番号が同じということは、基本的にこの二つの作品が同じものであることを意味している。「歌稿A」と「歌稿B」とは推敲の前と後に喩えられるかもしれない。それにしても不思議なのは、「石ヶ森」の岩質が、「歌稿A」では「安山岩」であるのに対し、「歌稿B」では「石英安山岩（デーサイト）」と表記されていることである。「歌稿A」が「歌稿B」より古い成立（書き写し）であることは確かなので、まず考えられることは、賢治ははじめ「石ヶ森」を「安山岩」の山と判断していたが、その後何かの機会に石英安山岩（デーサイト）であることが判明し、そのため「歌稿B」の段階で書き直したという推定である。

しかし、この推定は当てはまらないだろう。なぜなら、賢治は大正五年（盛岡高等農林二年）の夏期実習での地質調査（大正六年一月に「盛岡附近地質調査報文」として地質図とともに完成）の段階で、「石ヶ森」を石英安山岩（デーサイト）として判断しているからである。「石英安山岩」の項目に、「図幅の北西隅石ヶ森付近に稍々広く現出し灰白色なる石基中に斜長石石英及び疎に稍大なる黒色の輝石を散点す」と記述されており、かなり早くから賢治は「石ヶ森」を石英安山岩の山と判断していたことが分かる。安山岩と石英安山岩との違いは、見かけでの観察の場合、石英の結晶が観察されるか否かで区別されることが多い。賢治は報告書から分かるように石英の結晶の存在を確認しており、石英安山岩と判断したのだろう。

実際に「石ヶ森」の頂上付近の岩石を採取、観察してみると、見かけは安山岩である（写真6）。そこで、より確実な知見を得るために、考古石材研究所の柴田徹氏にプレパラートの作成と偏光顕微鏡による観察を依頼した（南昌山のプレパラートの作成も同氏による）。その結果は、石英が確かに存在しており（顕微鏡写真2）、賢治の観察自体に間違いのなかったことを示し

ている。ただ、石英の結晶の総量が少なく、柴田氏の判断では、一般的には安山岩と名づけられるだろうということであった。「沼森」も同様で安山岩（写真7）と見られるが、やはり石英の結晶を確認することができる（顕微鏡写真3）。したがって、

沼森がすぐ前に立ってゐる。やっぱりこれも岩頸だ。どうせ石英安山岩、いやに響くなこいつめは。いやにカンカン云ひやがる。とにかくこれは石ヶ森とは血統が非常に近いものなのだ。

という先に引用した右の表現も、地学的に的を射たものだということが証明される。

「石ヶ森」に関し、賢治は最初の段階から石英安山岩（デーサイト）と判断していたことはほぼ確実で、だとするならば、残された可能性は筆写ミスである。「歌稿A」は、その大部分が妹トシによる筆写と判断されるので、「安山岩」と書かれたのは、「歌稿A」段階での妹トシの筆写ミスであり、「歌稿B」の段階で賢治により、正しく石英安山岩（デーサイト）に直された、という推定である。

ただ、筆写ミスは可能性としては残るとはいえ、考えにくいことでもある。もし筆写ミスでないと仮定し、考察を進めるなら、そこから、賢治の「岩頸」意識に関わる〈テキストの揺れ〉という問題を取り出すことができるのではないかと考えている。

ここでも結論的なことを述べることはできないが、次に挙げる詩に見られる〈テキストの揺れ〉と比較してみることは、賢治のテキストの成立を考察する上で、何らかの切り口になるかもしれない。

前稿の「（七）基礎編：「〔地質調査ルートマップ〕」の検証（その1）―「五間ヶ森」とその周辺―」（「文学部紀要」文教大学文学部第23-1号）」で扱ったことだが、詩「風景とオルゴール」（「春と修羅」第一集）に描かれる松倉山と五間森の場合にも、〈テキストの揺れ〉が指摘できるのである。

繰り返しになるので全体の引用は避けるが、まずは「松倉山や五間森（ごけんもり）荒っぽい石英安山岩（デーサイト）の岩頸」という箇所に注目しておきたい。字句のまま解釈するなら、松倉山や五間森は「石英安山岩（デーサイト）」でできた「岩頸」だ、ということになる。

まず第一に、松倉山は「石英安山岩（デサイト）」の山でないことを確認しておく。「松倉山」はシルト質凝灰岩である。正確を期すため山の様々の箇所から複数の標本を採取しプレパラートも依頼し作成したが、判定結果は同じであった。

実は「風景とオルゴール」の次に置かれている詩「風の偏奇」には、「おゝ私のうしろの松倉山には用意された一万の珪化流紋凝灰岩の弾塊があり」という表現がある。「珪化流紋凝灰岩」というのは、〈珪化作用を受け硬くなった流紋岩質の凝灰岩〉ということであり、柴田徹氏が鑑定した「シルト質凝灰岩」と同じである。「シルト」は粒子の大きさを示す言葉である。

賢治はなぜ、松倉山を石英安山岩（デサイト）と記したのか、大きな問題である。

第二に、五間森も「石英安山岩（デサイト）」の山ではない。五間森は賢治が実地調査した「〔地質調査ルートマップ〕」に、賢治自身「Lip.」（リパライトの略で流紋岩のこと）と記している。賢治はなぜ五間森を「石英安山岩（デサイト）」の山としたのか、地学的見地からいえば明らかな誤謬である。五間森が流紋岩であることは、前稿で確認していることである。

このような〈テキストの揺れ〉がなぜ生じたのか。地学者・宮沢賢治という視点を取るかぎり、解けない謎として残ることになるだろう。ここで仮説的に提示できることは、このような〈テキストの揺れ〉も〈岩頸〉意識に関わっているのではないかということである。賢治は松倉山と五間森を「岩頸」と捉えている。しかし、前稿（前出）で触れたように、松倉山も五間森も、一向「岩頸」らしくないのである。松倉山は岩質が凝灰岩（堆積岩）であり、〈岩頸〉の資格がない。五間森は流紋岩なので「岩頸」となりうるが、山頂が押しつぶしたように平らで「岩頸」らしくない。

それでも賢治が両山を「岩頸」であるとしてこだわるとするなら、逆にそこに、問題を解く鍵が隠されているかもしれない。考えられることは、賢治はその内部（〈心象〉）に、岩の種類や、山の形状を無視してまで「岩頸」と呼びたい事情を有していたのではないかということである。その内部の事情が〈テキストの揺れ〉を生んだ原因ではないか、という推定である。

わたくしはこんな過透明な景色のなかに
松倉山や五間森荒（ごけんもり）っぽい石英安山岩（デサイト）の岩頸から
放たれた剽悍な刺客に
暗殺されてもいいのです

「岩頸から／放たれた剽悍な刺客に／暗殺されてもいいのです」とは奇抜な表現である。考えるに、「岩頸から／放たれた剽悍な刺客」とは、何らか〈伸びる〉「岩頸」と関係があるのではないだろうか。「岩頸」は賢治にとって〈伸びる〉ものとして認識されているがゆえに、「刺客」となることが可能なのかもしれない。「楢ノ木大学士」が恐竜という「刺客」に「暗殺」（食べられそうになる）されるということと、〈心象〉世界の問題として共通しているといえるだろう。

「（気の毒な二重感覚の機関）」という詩句も確認できるが、そこにわれわれは、賢治自身の〈現実〉〈心象〉という二つの世界に生きる不安と恐れを読み取ることができるだろう。

また、「岩頸」は〈いかる〉存在でもあった。散文「沼森」に「沼森めなぜ一体坊主なんぞになったのだ」とあったが、「坊主」になるとは山の木を切られたことを意味するように思う。木を切られて坊主となったことが沼森の「いかり」の原因と想定できるなら、詩「風景とオルゴール」での「（しづまれしづまれ五間森／木をきられてもしづまるのだ）」ということとの、かすかではあるが、繋がりが指摘できることになる。すこし異なるが、清作に無断で木を切られて〈いかり〉をあらわす柏の木の大王（童話「かしはばやしの夜」）との共通性も連想される。

さらに、「なぜさうこっちをにらむのだ、うしろから。／何も悪いことしないぢゃないか。まだにらむのか、勝手にしろ」という賢治とおぼしき人物の沼森に対する感情も見逃すことができない。このような、過剰なまでの自意識は、先に引用した「楢ノ木大学士の野宿」の原体験と推定される「歌稿B、№668」「ほしぞらは／しづにめぐるを／わがこゝろ／あやしきものにかこまれて立つ」にも見て取れるのだが、いうまでもなくこの「あやしきもの」が「岩頸」であることに意味がある。賢治にとって〈伸びる〉岩頸は、〈心象〉世界において、人間同様感情を有し、にらんだり、い

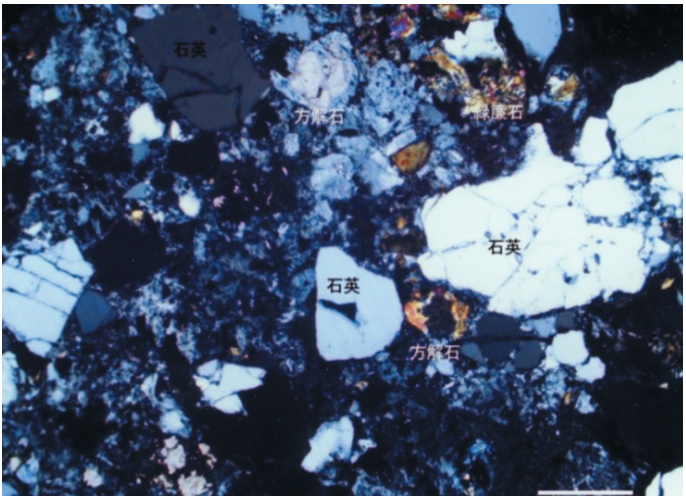
かりをあらわにするのである。

おそらく、賢治の自意識が暴走してしまったような場合、〈現実〉世界の地学（科学）が後退し、〈心象〉世界にふさわしい地学があらたに現れ、〈テキストの揺れ〉としてそのまま残されることになる、ということなのではないだろうか。

（了）

写真１　南昌山全景

写真２　南昌山の石英安山岩（デイサイト）



顕微鏡写真１　南昌山

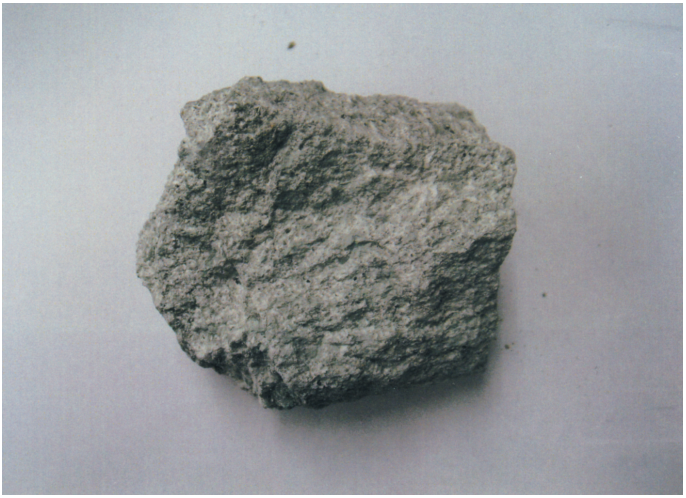
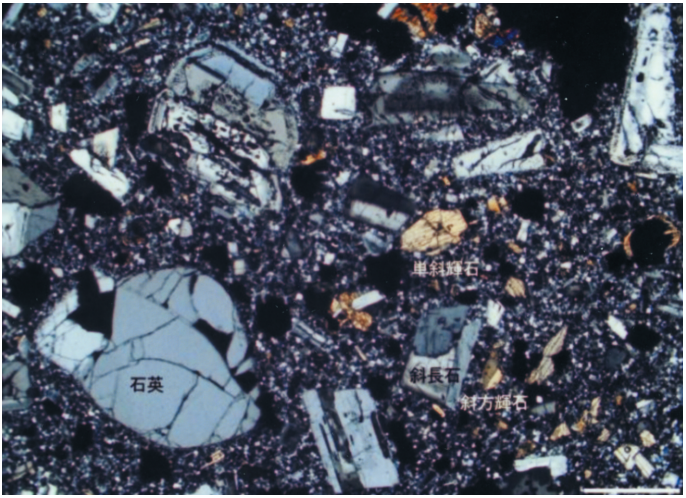


写真３　流紋岩質凝灰岩

写真４　沼森全景

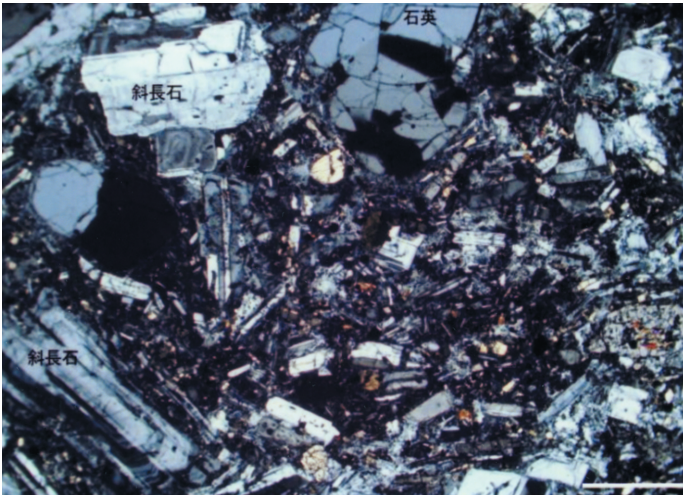
写真５　石ヶ森全景

写真６　石ヶ森の安山岩（含石英）



顕微鏡写真２　石ヶ森

写真７　沼森の安山岩（含石英）



顕微鏡写真３　沼森